

岡崎市議会議長 様

支出番号

会派名

チャレンジ岡崎

代表者名

小田 高之

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政 務 活 動 旅 行 報 告 書

令和4年 12月 13 日提出

活動年月日	令和 4 年 10 月 27 日 (木)	
氏名	杉山 智騎、近藤 敏浩、青山 晃子	
用務先 及び 内 容	1 10月27日	用務先 愛知県 豊田市
		内 容 中核市サミット2022 in 豊田
	2	用務先
		内 容
	3	用務先
		内 容
	4	用務先
		内 容
備 考		



令和4年度 行政視察報告書

令和4年12月13日(火)

チャレンジ岡崎 杉山 智騎

近藤 敏浩

青山 晃子

1. 視察日程

令和4年10月27日(木)

2. 視察先及び視察内容

・愛知県豊田市

中核市サミット 2022 in 豊田

3. 視察内容

10月27日(木) 13:00～

・基調講演「未来の未来を探る～AI・組織・コミュニケーションの視点から～」

日本大学文理学部 情報科学科 助教

次世代社会研究センター長

大澤 正彦

・パネルディスカッション

【テーマ】時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ

【コーディネーター】名古屋大学 名誉教授 山田 基成

【コメンテーター】有志団体 Dream On 代表 中村 翼

【パネリスト】姫路市長、奈良市長、松江市長

【趣旨説明】

コロナ禍を契機としたデジタル化の急速な進行や、2050年カーボンニュートラルの実現に向け、積極的な温暖化対策を通じて、産業構造や社会構造の変革がもたらされ、多くの産業もその在り方の転換が加速している。

また、近年の人口構造の変化により、地域の産業を支える中小企業等これまで培ってきた高度な技術の伝承や承継者不足などの問題も顕在化する中、イノベーションや新たな挑戦への機運醸成が求められている。

こうした中、地域の核である中核市は、新しい社会像や価値観の創出による産業の転換を的確に捉え、「産業のミライのその先」をイメージし、これまでの取組をアップデートしながら、自治体としてのあり方を描きなおす必要がある。

本パネルディスカッションでは、自治体としてこれらの産業変革とどう向き合うべきか、次世代の産業をどのように創出していくべきか、更に、実証実験等の先進的な取組の先にどのような「ミライのその先」を描くべきか、各市の事例発表を基に議論を深める。

【趣旨に沿った事例発表】

姫路市

世界遺産・国宝「姫路城」から始まる脱炭素ドミノ～脱炭素経営による地域経済のさらなる発展をめざして～

姫路市を含む東西 50 km の播磨臨海地域は国内有数の工業地帯であり、兵庫県内の産業部門・業務部門の温室効果ガスの約半分を排出している。

そこで姫路市が目指す地域脱炭素の将来像を実現するためにゼロカーボンシティ宣言をし、SDGs 未来都市の選定を受け、脱炭素先行地域の選定を受ける。

具体的な 3 つの取組み

- ① 姫路城ゼロカーボンキャッスル構想…脱炭素先行エリアの使用電力を再エネ 100%に。
- ② 資源循環型リサイクル（ボトル to ボトル）事業…伊藤園と提携し域内資源循環。
- ③ カーボンニュートラルポート形成計画策定の推進…水素・アンモニアの受入れ環境整備。

奈良市

新しい価値を生み出し「選ばれる町」を目指す。

若年層（大学卒業）の流出、女性就業率の低さが課題である。

具体的な取組みは、立地環境の優位性を生かし、高等教育機関との連携強化を図り、企業誘致・ルーツ企業の進出を促すことである。

松江市

持続可能な産業と暮らし～温故知新～

中心市街地の人出の減少が著しいことなどの解決が課題であるが、それに対し松江にしかない強みを生かし松江ならではの手仕事・ものづくり文化を生かすことで解決。

松平不昧公が育んだ茶の湯文化を生かし松江の未来を形作る取組みを。

具体的には職人商店街創出支援事業補助、まつえ循環プロジェクト。

【パネルディスカッション】

Q コメンテーター中村翼氏が 2050 年の各都市の姿を問う

A 中心市街の 8 車線道路を 4 車線とし、歩道を作りウォークアブルなまちづくりを推進している。照明の LED 化などで啓蒙を行い、脱炭素のドミノを狙う。新しい技術に期待しゼロカーボンシティとなっている未来を予想。（姫路市）

A 大阪万博 2025 以降の進展に期待するとともに、関西圏を一つのものと捉えていく。女性の就業率

アップと産業の担い手として外国人に期待する。(奈良市)

A 古くよりあるコミュニティの存在が強みでありこれ無くさないように努める。2050年の未来には価値観が一周回り、温故知新の松江が選ばれているのではないか。(松江市)

Q 2050年の未来が期待するものとなるために心掛けていることを問う。(中村翼氏)

A 播磨臨海地域、姫路ナンバーをつける180万人を一体と捉え、地域全体でゼロカーボンを実現していく。(姫路市)

A スタートアップ企業などの支援において産学界からの視点を心掛ける。そうなるよう、直にコミュニケーションをとる。市庁舎の中で仕事を閉じ込めない。(奈良市)

A 産業界との連携事業においては持続性が重要。当初、市がリードするも、軌道に乗せた後は後押しする立場に回ること。(松江市)

Q どのようなミライのその先を描きますか。(中村翼氏)

A 400年後を考えると400年前から考える。400年間少しずつ部分的に入れ替わりながらも継続している姫路城を中心に環境問題を考える。(姫路市)

A 行政としては、AI等技術の進展に伴い、現在の職員数2500人を500人にする。但し福祉・消防などは職員が担う。1,300年間続いている奈良市は南海トラフ地震に備え、居住の中山間地域への分散を図る。(奈良市)

A 1,800年前からあるまちとして、逆説的ではあるが今と変わらないまちの持続を目指す。その為に上品上質さに磨きをかけより光らせたい。(松江市)

Q 自治体として産業変革とどう向き合うべきか。(中村翼氏)

A 時代の転機であっても国際文化観光都市の中で、ザ・ジャパンが残っている場所であり続けることで産業変革と向き合う。(松江市)

A デジタルフォーマットを統一し、ごみ処理を民間と連携するなど行う。
過去、万博は新しい技術や商品が生まれ生活が便利になるきっかけとなったが、2025年万博後は、これまでにぞるだけで良いのか考える必要がある。(奈良市)

A 同じ方向を向く中核市とも連携していきたい。浮体式洋上風力発電事業において不可欠な浮体固

定鎖は本市で作っている。製造時温暖化ガスの排出は免れないが、その鎖が再生可能エネルギーを生み出すものとなる。(姫路市)

【コメンテーターの意見】

まず、ミライのその先を描くには、ミライのその先がどうなっているかでなく、ミライのその先をどうしたいか描く。また、人との広域連携で自分の殻を破る。そして、ミライのイメージを人ごとでなく自分ごととして多くの人に描いてもらう。そのために、例えば「空飛ぶクルマ」使い方コンテストや、OR体験会などを行い、「空飛ぶクルマ」のあるミライを自分事として描いてもらう。

【コーディネーターのまとめ】

産業のミライの目指し方は、姫路市は様々な素材産業が集積する工業都市、奈良市は歴史ある観光都市、松江市は歴史の長い自然に恵まれた都市とする。また、姫路市と奈良市は関西圏として2025年大阪万博という共通項をもつ。そして、三市に共通するものは行政指導的な立場をとりつつ、多種多様な人材を生かし、多様な産業主体との連携を目指す点である。

ミライその先を予想することは難しい。そこで具体的にこうなっていきたいと考える。そのうえで、実現に向けて行動する。トヨタ自動車のTBP(トヨタビジネスプラクティス)では、こうありたいというミライを掲げ、現状はどうであるか示し、その異なる点をどう変えていくのか知恵を出す。

少子化による人材不足に関しては、リスクリングに加えて、海外からの人材活用を提案する。多種多様な人材のなかに外国人を加えて頂くことをお願いしたい。

【コーディネーターの報告】

時代の変化にしなやかに適応する産業のミライと題したパネルディスカッションを行った。

近年、積極的な温暖化対策や人口構造の変化により産業構造や社会構造の変革がもたらされ、多くの産業もその在り方の転換が加速している。自治体としてこれらの産業変革とどう向き合うべきか、次世代の産業をどのように創出していくべきか、各市が事例発表を行った後、コメンテーターからの質問に答える形で議論を深めた。

姫路市は、姫路城ゼロカーボンキャスル構想で脱炭素ドミノを、カーボンニュートラルポート形成計画で水素アンモニアの受入れ環境整備を行うなど脱炭素経営による地域経済のさらなる発展をめざす。

奈良市は、若年層(大学卒業)の流出、女性就業率の低さを課題と捉え、地域全体で企業誘致、観光魅力向上、産官学連携等で解決につなげる。

松江市は、そこにしかない強み、手仕事・ものづくり文化を生かした職人商店街創出支援事業やまっえ循環プロジェクトに取り組む。松平不昧公が育んだ茶の湯文化を生かした温故知新にて持続可能な産業と暮らしのあるミライを描く。

中村コメンテーターから三市への、ミライの姿実現のために心掛けることは何か、ミライその先をどう描くかの問いかけにより、それぞれの市のチャレンジと、それぞれの資源を生かした取組み、行政主導で産官学と連携をとりながら進める取組みが確認出来た。ミライのその先を予想することは難しいが、どうありたいか目指すミライを描くことは必要である。また、多くの市民に我が町のミライの姿を

我がこととして描かせることも重要である。

人口構造の変化に対しては、人口減少を直接的にとめるよりも、リスクリングと外国人を含む多種多様な人材の活用を進め、新たなチャレンジへの機運醸成やイノベーションにつなげていく。

【パネルディスカッションを拝聴して】

本パネルディスカッションは、第1会場のテーマである「時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ」に対し、自治体として産業変革とどう向き合い、次世代の産業をどのように創出していくのか、各市の事例発表を行い、更に、中核市サミット2022のテーマである「多様な主体とつながり、つくり、暮し楽しむ」をふまえたうえで、自治体としてどのような「ミライのその先」を描くべきかを中心に、趣旨に沿って議論を深めていくようなコーディネートであった。

コメンテーターが質問し、パネリストが回答する形で議論が行われた。コメンテーター自身が描く、「空飛ぶクルマが当たり前にあるミライ」への取組みを紹介し「ミライのその先」を描くためには、多種多様な人とつながりを持つこと、「ミライのその先」のイメージを人ごとでなく自分ごととして多くの人に描いてもらうこと、そうあるべきとまとめた。

姫路市長の発言に「脱炭素は足かせでなく成長産業」と有るように、ビジネスチャンスと捉える産業界は先進的な取組みにつなぎやすい。行政が主導し産官学連携で進めた取組みにいかにして市民を巻き込んでゆかか、中村コメンテーターの発言にあるように、そのことが重要である。

基調講演のなかで講師が、「ともにドラえもんをつくる」との表現をもちいて、ミライは共に描き、共に作るものであり、一人一人に寄り添えるものとするとしていた。行政の目指す「ミライのその先」が、一人一人が思い描いたものであれば、共に向かっていける。行政が一人一人に寄り添える「ミライのその先」を実現するためにドラえもん（人間を上回るAI）を作るのだと言っていた。それを念頭に置き、パネルディスカッションを拝聴するとコーディネーターのまとめに納得がいく。

また、本サミットのテーマ「多様な主体とつながり、つくり、暮し楽しむ」に鑑み、人口構造の変化に対しては外国人を含む多種多様な人材の活用を進め、新たなチャレンジへの機運醸成やイノベーションにつなげていくとまとめたことに関しても同様に納得するものである。

・パネルディスカッション

【テーマ】時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ

【コーディネーター】名古屋大学 名誉教授 山田 基成

【コメンテーター】有志団体 Dream On 代表 中村 翼

【パネリスト】姫路市長、奈良市長、松江市長

・「全員が個性を生かした生産性の高い組織を作る」「次世代の求められる能力を育てる教育」「誰一人取り残さない共生社会を実現する」をつくるためのコミュニティづくりについて、日本大学での実績と今後について。

【課題解決にあたって】

・プロジェクトベースは失敗する。課題を掲げて人を集め始めるが、お互いの理解が足りず、草の根活

動も足りないなど様々な問題が起き、失敗する例を多く見てきた。「何をやるか」ではなく「つながる」ことから始めるコミュニティベース(お互いの気心が知れた者同士で共感を生みながら自然に生まれるプロジェクト育てていくこと)を大学で実践している。

【大学での実践】

- ・自分自身についての言語化を重ねることで情報の感度が良くなる。感度が高く自分を表現できる学生を育てあげた上でコミュニティに接続すると様々なプロジェクトが生まれる。

- ・うに型組織(みんながばらばらの方向を向きつつ根っこではしっかりつながっている。リーダーフォロワーではなく、互いに支え合うような組織)についても議論を進めている。コミュニティ運営でのキャッチフレーズは「100人で100人の夢を叶える」。人のつながり、コミュニティのあり方、価値創出のあり方に変化が起こるのではないかと考えている。

- ・次世代社会研究センター(多種多様な立場の個人や組織が参画したコミュニティベースの研究教育拠点)

特徴的なのは、プロボノ(専門性を活かしたボランティア)という仕組みを大学に作ったこと。企業や自治体関係者等、大学の関係者じゃなくても大学の中のコミュニティに入ってきて一緒に活動ができる。

- ・地方自治体が常に無理なく情報を共有して連携する。国も企業も大学も個人も立場関係なく、誰の困り事であっても解決可能な誰かにその声が届く場所を目指し、研究センターの大学院化を目指している。市職員を送り出して欲しい。

【提言】

- ・本年度、本市でも高校生プロジェクトなども始まった。市内在住、または市内の高校に在籍する高校生が対象であり夏に籠田公園でイベントを開催した。コロナで実施できていない文化祭を、とのことだったが、顔合わせからイベント実施までが短く、何をやるかある程度大人の側で道筋を考えていたようにも見える。初めての試みで単年度事業だったことも影響したのではないか。高校生プロジェクトを通してまちづくりに関心を持ち、卒業後もまちに関わる大人を育てるという目的もあると聞いている。性急な進め方は却って気持ちを削ぐのではないか。「コミュニティベース」で進めることの検討を希望する。

・パネルディスカッション

【テーマ】多様なつながりと描く地域共生社会のミライ

【コーディネーター】同志社大学 社会学部 教授 永田 祐

【コメンテーター】日本大学文理学部 情報科学科 助教

次世代社会研究センター長 大澤 正彦

【パネリスト】岐阜市長、吹田市長、豊田市長

豊田市長 【誰ひとり取り残さない包括的な支援体制の構築—幸福寿命を全うできるまち「豊田」を目指して—】

幸福寿命(=健康寿命+快適期間)を全うするためには誰ひとり取り残さない包括的な支援体制の構築が必要。

○参加支援事業（社会参加に向けた支援）→民間活力の導入

取組事例 再発防止×社会参加

「万引きを繰り返してしまうひとり暮らし高齢者に役割を担ってもらい、社会との関わりづくり」

高齢者×社会参加

「認知症高齢者とひとり暮らし高齢者が、障がいのB型就労の場に参加し、高齢者と障がい者の地域共生」

○権利擁護支援体制

取組事例 とよた市民後見人養成講座

法律専門職との連携

健康寿命を延伸する取組

- ・官民連携による社会参加・介護予防プログラム（SIB）の提供等

快適期間を充実する取組

- ・地域リハインベーションセンターの設置
- ・地域医療人材育成センターの設置

岐阜市長 【自分らしく働ける雇用のあるまち～ワークダイバーシティの推進～】

幸せを実感するためには

- ・安全安心な「居場所」
- ・持てる力を発揮できる「出番」

↓

社会で【働く】こと ☆働くことを土台とするまちづくり

ワークダイバーシティの重点的は取組

- ① 超短時間雇用創出事業
- ② テレワークを活用した ショートタイムワーク事業
- ③ WORK! DIVERSITY 実証化モデル事業

吹田市長 【中核市アライアンス 新たな圏域デザイン】

NATS（ナッツ）による中核市連携の可能性

N（西宮市）、A（尼崎市）、T（豊中市）、S（吹田市）

※全国の中核市で4市が並ぶのはNATSのみ

実績

- ・地球温暖化対策基本協定 ・気候非常事態共同宣言 ・バイオマスプラ製ごみ袋
- ・大学連携制作研究 ・給食プラスチック廃止 ・文化ホール連携 ・労働相談
- ・ネットワーク人事異動 ・シェアサイクル共有 ・職員マッチング

問題点

- ・ 持続可能性を高めるべき政策を単一自治体同士が競争的に取組む
- ・ マスコミ、情報誌、ランキングに競争を煽られる
- ・ 市民が自由に移動、活動する社会経済文化圏域を自治体ごとに考えてしまう

提案

- ・ 過度に束縛されない柔軟で動的なアライアンスを
- ・ 当面のコストパフォーマンスではなく、パフォーマンスコスト効果対費用 C/B
- ・ 首長主導の属人的連携の弱み 行政組織に制度として織り込み、文化とする

【提言】

このパネルディスカッションから学ぶこと、取り入れることが非常に多く、有意義な時間をいただいた。豊田市の包括的な支援は、健康寿命にとらわれるのではなく、その後の快適期間（自立した生活ができなくても、サポートを必要としながらも快適に過ごせる期間）も考慮し、健康寿命の延伸と快適期間の充実に対して支援を行うというもの。福祉の窓口を各支所に設置し、重層的支援体制整備では、断らない相談支援から始まり、自宅訪問等のアウトリーチ支援、多機関の役割分担を明確にした多機関協働事業、そして民間活力を導入した参加支援事業、世代や属性を超えた住民同士が関われる地域づくり事業など、連動した支援体制が構築されている。岐阜市の働きづらさを抱える方が自分らしく働ける環境を整えることにより、人生の居場所や出番を創出し、誰もが幸せを実感できるまちに！という考えのワークダイバーシティ。障がいのある方でも、育児中・育休明けの方でも、ニート・引きこもりの方でも働くことによる地域社会とのつながりや絆を創出し、人々の幸せを向上させる。吹田市の中核市連携の可能性。単一自治体だけで考えにとらわれるのではなく、広域的に連携し、助けられつつ、お助けをする支援受援同時進行。本市でも取り組むべき取組が多かった。特に中核市連携の実例は目から鱗で、競争するのではなく助け合う。まさにこれからの時代にマッチした考え方だと感じた。本市も豊田市、豊橋市、一宮市と連携し、それぞれの市の強みを生かして、弱みをカバーする取組を積極的に行う必要がある。そのために今回参加した中核市サミットなどは良い機会であり、首長同士の交流を深めていただき、これからの少子高齢化社会に向かって、広域的に政策を行っていくべきであると提言いたします。